

第九回 「宮古島文学賞」 選考評

椎名 誠

第九回宮古島文学賞は「六月の手拭い」（宮里尚安）に決定しました。

この作品の舞台は宮古島。

戦後、まもない頃、宮古島の農村地から一人の青年が南米のボリビアに移民することになった。その移民を支持する人たちと反対する人たちとの対立論争がおきた。反対するのは主に女たち。賛成するのは男たちだった。結果的に青年は家族とともに移民していった。その消息は不明となり、五十年という年月がすぎた。

物語はそこから始まる。

青年の生まれ故郷には「いいなずけ」が残されたままであった。あるときボリビアにおける青年の妻だという女性が青年の「いいなずけ」の女性に手紙を届けに来日する。青年本人が里がえりできない理由がやがてあきらかになり、その人生的な謎をめぐる二人の女の立場の違う熱情が語られる。

この小説の題名ともなった手拭いの使われかたの優しいいきさつが描かれ、小説としての深いあじわいがそこからこちよく膨らんでくる。短編小説としてさわやかにまとまったそのできばえが評価された。選考委員がそれぞれの視線から称賛した。

今回は二席に二編の短編が選ばれた。

「うむいでい（思い出）」（下地カナ）

ある日、防空壕の跡地で骸骨が露出したところから話が始まる。主人公の宮国少年の父親は「日本兵の遺骨だろう」と話していた。主人公の少年の友人たちが「肝だめし」に行こう、と誘うが少年は気乗りしなかった。結局、一緒に行くことになるがそのとき「たこつぼ」に落ちてしまう。たこつぼからはい出ると、そこは太平洋戦争末期の宮古島だった。

タイムトラベル・ファンタジーである。島の自然や風土のなかでくりひろげられる慎重深いものがたりが評価された。

二席のもう一編「追壊の赤い日」（雲海倫）は、東京の美術大学に通う「わたし」が

静かにかたりはじめるモノログで話が始まる。小さい頃から生活や思考のそこかしこに様々な影響をうけた曾祖母が亡くなった、というしらせをうける。東京に生まれ、沖縄で育った「わたし」は成長していくおりに聞いて育った沖縄の歴史と戦争の影響下での沢山の思いをつむぎ、思考を深めていく。自分が描いていこうとする絵への思いと抱き合わせて、曾祖母への追憶を重ねあわせていく。戦争が吐き散らしていた苦しみの残滓に怒りを重ねて火や花や血の赤い色をなぞっていく作者の文章の力に圧倒される。

今回は力のこもった作品がたくさんあった。受賞は逸したが「月夜さんの待ち人」（水分朝陽）という作品にひとこと触れておきたい。

不思議な魅力をもった伝奇小説だった。南島の「雨月物語」とでもいいたいような作風は、丁寧にもっと長く書いていったらとてつもない傑作になっていくような興奮を得た。